

【『琅』四十三号・あとがき】

一見、あまりにも当たり前過ぎて、異を唱えるのが難しい言説がある。

たとえば、最近、別のバージョンに変わってしまったようだが、一年ほど前まで盛んにテレビで流されていた、あるIT関連会社のコマーシャルが気になっていた。それは、「仕事の見える化」を支援するシステムを開発・販売している会社のCMで、コロナ禍で普及してきたリモートワークを視野に入れたものと思われた。

CMでは、システムの紹介・売り込み役のタレントとそのシステムを導入しようと考えている会社社長役のタレントとの間で、「隠れた努力を見逃さない・・・」「社員の努力を見逃さないITの運用・管理・・・」「社員の努力を見逃さないITの運用・管理・・・」といったやり取りが展開されている。つまり、社員は毎日出社して来ないが、このシステムを用いれば、彼らの日々の努力を見逃すことなく、正當に評価できるということを売りにしているらしい。

会社であれ学校であれ一般社会であれ、縁の下の力持ちとして、人知れず努力している人がいたら、そのことに気づき、評価しようということに異を唱える人はいないだろう。「あなたの努力が正當に評価されるのです！」と言われて、「やめてください!!」とは言い難い。

このテレビコマーシャルが気になるようになって間もなく、ラジオを聞いていたら、あるコラムニストがこんなことを言っていた。彼は、コラムニストになる前、一般の企業に就職して、外勤の任務にあたっていたが、そのとき、先輩社員からはじめに教えられたのは、どのようにして仕事をサボるかということだった、というのである。「仕事の見える化」をされたら、即アウトとなるような話である。それでも、「見える化推進」の社長より「サボり方推進」の先輩の方に親近感を覚えてしまうのは、私が怠け者

だからだろうか、あるいは、私が人を使うような立場にならなければならないか。

今から三、四十年前、いじめ問題がマスコミで盛んに取り上げられていた頃、新聞にとでも気になる投書が掲載された。それは、投稿者が小学生のときのこと、学級の雰囲気や人間関係を良くしていきたいという学級担任の発案で、「学級裁判」が行われるようになったというものである。日々、担任の所に持ち込まれる子ども同士の些細なトラブル（誰々が意地悪をした、誰々が約束を守らなかつたといった類の事柄）の解決・解消をねらってのことだったようだが、次第にそれは魔女狩りさながらの裁判になっていった。ある日、担任が不在のとき、別の教師がやってきて「学級裁判」のことを知り、すごい剣幕で叱責を受けたが、なぜこんな面白いことをやってはいけないのか分からなかつた・・・という内容だった。

学級の雰囲気をよくしようという意図も、ルール違反・マナー違反を注意することも、それ自体は批判されることではないだろう。おそらく、「学級裁判」に参加していた子どもたちのほとんどは、良いことをしていると思って取り組んでいたのではないか。良いことと思ってやっていることを止めさせるのは簡単なことではない。正面切って批判できないうことは、それがもたらす「副作用」には気づきにくいということでもある。

(茂治)

(次号原稿締め切り日) 二〇二三年九月末日

『琅』四十三号 二〇二三年一月 発行  
編集・発行人 松村 茂治  
発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19  
『琅の会』・ 缶 (〇四二一七七三一五九二七)